

書下ろし長篇山岳サスペンス

裏街山脈

Rintaro Azusa

梓
林
太
郎

kosaido blue books

裏街山脈

KOSAIDO BLUE BOOKS

著 者 梓 林太郎

発行者 櫻井道弘

発行所 廣濟堂出版

〒105 東京都港区芝3-4-12

電話 03(5445)1202(営業)

03(5445)1204(編集)

振替 00180-0-164137

印刷所 廣濟堂印刷株式会社

〈編集担当〉大西 修

©1997 梓 林太郎

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-331-05738-0 C0293

書下ろし長篇山岳サスペンス

裏街山脈

Rintaro Azusa

梓

林

学院図書館
書章

kosaido blue books

ISBN4-331-05738-0

C0293 ¥762E

定価 本体762円 + 税



1920293007625

誘拐・失踪・怨恨が絡み合う

東京・北世田谷署管内で幼女の誘拐事件が発生し、忙殺される捜査本部に一通の告発文が届く。それは強行犯係の水田刑事が、妻子と別居し、少女と同棲……というものだった。水田は事実を認め、自宅謹慎処分となるが、誘拐と前後して少女が失踪したため、彼は、少女が残した地図をたよりに信濃大町の別荘へと行き、変死した男に遭遇することになる。被害者と少女の繋がりを追った水田は、男が一年近く前に、西穂高で遭難事故に遭っていたことから、彼の登山関係者を洗っていった。そして意外な人物と事実を知ることになる……。

rosaido blue books

裏街山脈

梓 林太郎

裏街山脈

本文イラスト

谷口
茂

1

八月七日、立秋――

午後三時ごろ、東京の南東部に強い風が吹き、夜が訪れたように空は暗くなった。風がややおさまると雷鳴がとどろき、大粒な雨が襲った。たいていの人は傘を持っていなかったから、声をあげて駆け出し、軒下に入ったり、駅に向かって走った。

雨は四時前には上がった。黒い雲は北に去り、陽が射し始めた。住宅街の濡れた屋根は西陽に照らされて輝いた。ひと雨きて涼しくなるだろうと予想したが、灰色の雲を割って照りつける陽射しは強く、雨がくる前よりも蒸し暑くなった。

雨で衣服を濡らした人たちは、今度は内側から

蒸され、顔に流れる汗をひっきりなしに拭った。

六時二十二分。警視庁北世田谷署に、管内の江川^{がわ}という家から電話が入った。五歳の女の子が、自宅の約二〇〇メートル北側にある公園からいなくなったというのだった。

理恵^{りえ}という幼女が姿を消したのは、一時間あまり前の五時ごろという。

母親は公園で理恵を遊ばせていたが、ここにいるようにといいつけて、近くのスーパーへ買い物に行った。十五分ほどして戻ると、ブランコと滑り台のある砂場で遊んでいるはずの理恵の姿がなかった。

砂場には双子を連れた母親がいた。買い物袋を提げて戻った母親は、理恵の服装を双子の母親に話し、見掛けなかったかと尋ねた。双子の母親は、たったいま砂場にきたのだが、誰もいなかったと答えた。

理恵の母親は蒼くなって、近所の人に応援を求めて付近をさがした。応援を求めたといっても、不在の家が多く、彼女の呼び掛けに協力したのは三人の主婦だった。

理恵は見つからなかった。公園の近くの商店の人にもきいたが、気づかなかったといわれた。

母親は、夫の会社へ電話した。ひとまず警察へ届けるべきだということになり、所轄の北世田谷署に電話を入れたのだった。

この通報を受けた刑事課は、ただちに中島署長^{なかじま}に伝えた。中島署長は、かつて誘拐事件捜査の指揮官をつとめた経験があった。

署長は腕時計に目を落とした。六時三十四分だった。

「少女は今夜中に帰れないだろうな」
彼はそうつぶやいた。

幼児が行方不明になり、午後六時を過ぎても発

見されない場合、帰ってこないケースが多かった。彼はこれ pensando、眉間に皺を立てた。

署内に非常招集が発令された。管内各交番に緊急連絡が飛んだ。署の最上階にある独身寮にいた非番の署員が集められた。防犯、警備、交通を問わず、手のすいた署員三十二人が招集された。それに刑事の十六人が加わった。六時五十三分だった。

署長は、集まった全員に三時間の搜索を命じた。理恵の足取り捜査、公園や神社や河川の搜索をし、午後十時十五分に署の講堂へ戻って、結果を報告させることにした。

刑事だけが二人一組になり、理恵が姿を消した公園付近から聞き込みを開始した。

刑事二課の係長は部下二人とともに、江川家を訪ねた。

両親がそろっていた。理恵は一人娘だった。

係長は母親から、理恵が遊んでいた公園に人がいたか、それはどんな人だったかを思い出させた。誘拐が考えられたからである。

身代金目的の誘拐だった場合、かならず犯人から連絡が入る。電話が入った場合、次の電話連絡に備えて、逆探知装置を取りつけることなどを説明した。

午後十時十五分、搜索に散っていた四十八人全員が署の講堂に集合した。

聞き込みや搜索の結果をきいたあと、明朝、同所へ集合することを命じて解散した。

署長と管理官などの幹部が残り、あすからの捜査方針を検討した。営利誘拐を視野に入れての捜査会議だった。

強行犯係の刑事・水田定幸^{みずたさだゆき}は、自分の席に戻って帰宅の支度をしていた。そこへ警務係長がやってきて声を掛けた。警務課へきてくれというのだ

った。

水田は、はっとして思わず胸に手をやった。警務課へ行くと、課長がメガネをはずし、

「遅くまでご苦労さま」

といって椅子を勧めた。

課長の横に警務係長が腰掛けた。

「疲れているだろうが、気になることがあるものだからね」

係長はいった。

課長が白い封筒を机の引き出しから取り出し、水田の顔をにらむような目をしてから、
「こういうものが、きょう届いたんだ。読んでみてくれ」

といって、封書の水田の前へ押した。

白い封筒の宛先は「北世田谷警察署 警務課長様」とワープロで打ってあった。

水田はそれを手に取り、裏返してみた。差出人

名はなかった。匿名の投書という想像がついた。

課長と係長は、中を早く読めという目をした。

中身の手紙もワープロ打ちだった。無味乾燥な文字が横に並んでいた。

「おたくの署の水田刑事は、警察官にあるまじき生活をしているのを、ご存じでしょうか。

彼の最近の生活を幹部が知っていて、見て見ぬふりをしているのだとしたら、これは問題です。もしそうだとしたら、これと同じ手紙を、警視庁にも、都内のおもな警察署にも送ります。

水田刑事のほんとうの住所は、世田谷区下馬五丁目なのに、現在は同区祖師谷四丁目に、たぶん十代と思われる女の子と住んでいます。

こんな警察官はきいたことありません。普通の会社のサラリーマンでも、いまの生活が幹部に知れたら、タダではすまないと思います」

水田は肚はらの中で、「しまった」とつぶやいた。

誰が連絡したのか、直屬上司の古宮ふるみや刑事課長が疲れた表情でやってきて、

「なんですか？」

と、警務課長にきいた。

警務課長は古宮課長に椅子を勧めると、たったいま水田が読み終えた匿名の投書を手渡した。

古宮課長は四十六歳だ。一貫して刑事畑を歩いてきた男である。

投書を読み終えたと、

「この内容は、ほんとか？」

と、水田にきいた。

「事実です」

「まずいな」

「申し訳ありません」

「なにか、事情がありそうだな」

古宮は、手紙を封筒に入れ、

「水田と直接話をさせてください」

と、警務課長と警務係長に断わった。

水田は古宮に促されて椅子を立った。

二人は相談室に入った。誰もいなかった。一般の人が困りごとがあつてやつてくると、担当者が話をきいたりする部屋である。

「君はたしか、私より五つ下だったな？」

古宮は、タバコに火をつけるといった。

「四十一です」

「やっかいな事件が起きたというのに」

「なにも報告していなくて、申し訳ありません」

水田はあらためて頭を下げた。

「奥さんと別居しているのか？」

「はい。三カ月になります」

「なにかあったのか？」

「女房とは、今年に入ってから、諍いが絶えなくなりました」

「君に若い女ができたからだろ？」

「それはずっとあとです。娘のことを話題にする
と、かならず意見が衝突するんです」

「どうして？」

「女房は娘を、私立高校へ上げたがつています。
渋谷にある松ノ山学園です」

「いい学校らしいな」

「娘のいまの成績では、受かるかどうかギリギリらしいんです。それより私は、都立へ行かせたいんですが、近所に、都立へ行っている子で、素行そこうに問題のある子が二人いるものですから、その二人を見て、都立へ入るとああいうふうになりそうだと、女房は心配でならないんです」

「松ノ山学園は、入学金もバカにならないんじゃないのか？」

「それも私が反対する理由のひとつです」

「妻子と別居するなんて、タダごとじゃない。原

因は娘さんの進学のことだけじゃないだろ？」

「去年のいまごろから、私と女房はあまり話さなくなりました。私のほうから話し掛けることがめつたになくなりました」

「奥さんは、働いているっていつてたな？」

「近くの眼科医院で、受付をやっています」

「奥さんの収入は？」

「二十五万円ぐらいです」

「助かるな」

「家を買った借金がありますから」

水田は六年前、一戸建ての中古住宅を買った。

知人が所有していたのを、相場よりずっと安く手に入れた。彼の母と兄に頼んでその資金を借り、月々返済しているのである。

「投書にある、十代と思われる女のコと住んでいうのは？」

「それも事実です」

「どういう女のコなんだ？」

「二カ月ぐらい前に、下北沢駅のホームで知り合いました」

「そのコは、何歳なんだ？」

「十七です」

「そのコと知り合ったんで、奥さんたちと別居することにしたんじゃないのか？」

「別居したのは、その前です」

「未成年の女性と同居している。警察官でなくてもそれはまずいよ」

「分かっています」

「なぜ、一緒に住むことにしたんだ。そのコはまともじゃないんだろ？」

「まともとはいえませんが。高校を中退して、家を飛び出してきたようですから」

「地方の出身かね、そのコは？」

「長野県諏訪市です」

「確認したのか？」

「いいえ」

「そのコの親から、訴えられるぞ」

「覚悟しています」

「覚悟しているって、そのコを郷里に送り帰す気はないのか？」

「本人にその気がないんです」

古宮は、あきれたというふう天井を向いてタバコの煙を吐いた。

水田は、現住所と電話番号を書いて渡した。

2

水田が彼女を見掛けたのは、下北沢駅の小田急線ホームだった。二カ月前のことである。

その日は彼は新宿駅の近くに用事があって、小田急線に出掛けた。北世田谷署は小田急線梅ヶ丘駅から歩いて五分ぐらいのところにある。

新宿での用事はすぐにすみ、彼は署に戻るつもりで各駅停車の電車に乗った。下北沢に着くと、一時間ほど前、往くときに見掛けた若い女性が、さつきと同じ恰好でホームのベンチに腰掛けていた。

彼はその女性が気になった。もっと正直にいうと魅せられたのだった。

彼は発車の合図のあった電車を飛び降りた。ホ

ームの少し離れたところから、ベンチに腰掛け、通過する電車や、停車した電車の乗降客をぼんやり眺めているらしい彼女を観察していた。

彼女はグレーの地に赤い欧字の書いてあるＴシャツに白い短パンをはいていた。白いスニーカーの足元には黒いデイパックらしい物が置いてあった。

髪を後ろで束ね、光ったクリップでとめている。面長で目が大きい。

彼女は、長い足を組み替えるとタバコをくわえた。水田の見当では十八、九に見えた。

彼女は吸い殻を足元に捨てると、それをスニーカーで踏みつけた。なんとなくやることなくて駅にいるようで、人待ち顔には見えなかった。

水田は彼女に近づき、

「誰かを待っているの？」
ときいた。

彼女の足元には彼女が吸ったと思われる吸い殻が七、八本踏みつけられていた。

彼女は水田の質問に首を横に振った。

「警察の者なんだ。あんたはきつきからずっとここにいるじゃないか。どこからきたの？」

「荒川区」

「そこは、あんたの住所？」

「友だちのところ」

彼女の瞳は栗色だった。

「これからどこへ行くの？」

彼女は答えず、足元のザックをけだるそうに持ち上げて膝に置いた。

「あんたの住所は？」

彼女は栗色の瞳を動かしてから横を向いた。

補導された経験があるなど水田は見抜いた。

「住所を教えてくださいませんか」

彼女は答えなかった。

「答えてくれないと、署へ行って話をきくことになるよ」

「友だちのところへ帰るんです」

「荒川区の？」

「ええ」

「あんたが住んでいるところは？」

「遠くです」

「遠くじゃ分からない」

「諏訪です」

「長野県の？」

「ええ」

「そこから出てきて、荒川区の友だちのところにいたんだね？」

「彼女はうなずいた。」

「家族に無断で家を出てきたのではないか。」

「あんたは高校生だね？」

「彼女は首を横に振った。」

「卒業したの？」

「この質問に対しても彼女は首を振って否定した。」

「この駅の近くに友だちでもいるの？」

「さがしたけど、分からなかったんです」

「その住所は？」

「前にきたことあったから、分かると思ったんです」

「正確なアドレスは知らないということらしい。」

「水田は、彼女の住所だという諏訪市の町名などを詳しく教えてくれといった。」

「問い合わせするんですか？」

「あんたは未成年だろ。なんとなく行くところがないみたいじゃないか。ご両親に問い合わせをされては困ることがあるんだね？」

「ええ」

「なぜ？」

「いえません」